

# 世界をみつめて4

## 記念碑に刻むもの

長谷 邦彦

09年夏、韓国・濟州島を旅した。標高1950<sup>m</sup>、世界自然遺産の漢拏山（はるらさん）を中央にいただく島。20を超えるゴルフ場に日本人が群がる。

その島に「暴力の20世紀」を思い知らされる施設がある。「濟州4・3平和公園」。島の東北寄りの山中に、昨年春こつ然と現れた緑の公園である。国費も投入して完成させたというのに、ホテルでもらった観光パンフには記載がなく、タクシーの運転手からも「え、どこ？」と聞き返された。

濟州島では、アジア太平洋戦争終結後、つまりは日本植民地支配からの解放後、「独立朝鮮の国のあり方」をめぐる、すさまじい暴力の嵐が吹き荒れた。朝鮮半島の北半分はソ連が、南半分は米国が占領し、それぞれに自国に都合のよい国家づくりを進めていた時代だ。1947年3月、自主独立国家の建設を求める島民と警察の小競り合いで島民6人が射殺され、これに怒った一部島民が、米軍政を支える地元警察署を襲撃する事件が起きた。48年4月3日。これを発火点に、直後に成立した韓国政府と軍、警察、右翼団体が一体になった島民虐殺作戦と、これに対抗する左派系のゲリラ戦が7年間にわたり、続いたのだった。

血縁同士の殺し合いも含めて、「4・3事件」と総称される悲劇の犠牲者は3万人前後に上るとされる。だが、事件終結後の長い軍事政権下、その真相を口に出すことはタブーとされた。真相究明・犠牲者の名誉回復に向け政府が動き出したのは99年、金大中大統領の時代になってのことだ。03年、愚武鉉大統領は「事件に当時の政府が関与した」事実を公式に認め謝罪した。「4・3平和公園」はその流れで建設された。

園内の刻銘碑には約2万人の犠牲者の氏名が刻まれている。なだらかな丘陵を覆う緑と、澄

み切った青空。「無数の死」として記憶するのではなく、「名前を持つ死の群れ」として記録する姿勢に、平和への決意が読み取れる。

世界を見回すと、こうした施設は各地に散在する。ロシアのボルゴグラードは第2次大戦中のナチス・ドイツ軍との攻防で知られる。30年以上前に記念施設を訪れ、内壁を覆う7200人の名に圧倒された。100万人とされる死者のうち、施設のある丘の近辺で死んだソ連軍兵士の名前だ。父親の名が刻まれている女性と、ヒロシマからやってきた被爆女性が抱き合って涙した。

今年訪れたハワイ・パールハーバーでは日本軍の奇襲攻撃による米軍犠牲者のうち戦艦アリゾナ乗務員千百人余の名前があった。数々の勲章で胸を飾った元兵士の老人が車いすで見ると、米国人見学者から拍手が沸いた。

上記の2つの刻銘碑が自国の「英雄」を称える装置であるのに対して、沖縄の「平和の礎（いしじ）」は意味が違う。太平洋戦争末期、沖縄戦で死んでいった日米両軍兵士、戦闘に巻き込まれて犠牲になった沖縄県民やアジア諸国の人々の名前24万人余が刻まれている。「戦場ではすべてが犠牲者だ」と、生き残った者としての戦争否定の意思表示だ。

それでは「4・3事件」の刻銘碑の訴えるものは？加害者と被害者が入り交じる死者のリスト。いかにもむごい。だれもがイデオロギーの対決と国家のエゴイズムに殺された、と言うべきだろう。生き残った人々の心の傷は深い。個々人の力では抗いがたい「暴力の文化」が支配する現代世界を告発するものだ、と考えたい。

資料館の中に、円錐状の、何の飾りもない、暗く狭い部屋があった。床に白い棺のようなコンクリートの塊が置いてあり、高い天井の穴から一筋の光がさしていた。「いつか事件の名前が正式に決まって、この塊に刻み込める日を待っています」とガイドさんが流暢な日本語で語った。暴力の文化から平和の文化へ。人類の未来に光をもたらす文字がほしい、と切に願った。

ながたに くひこ（教授・メディア論）